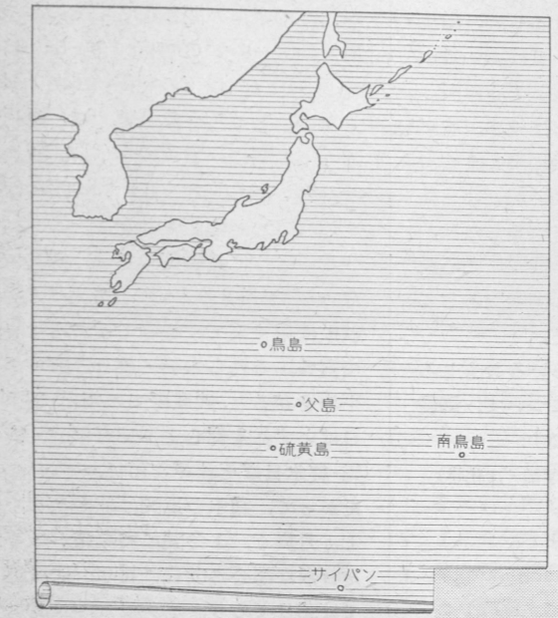
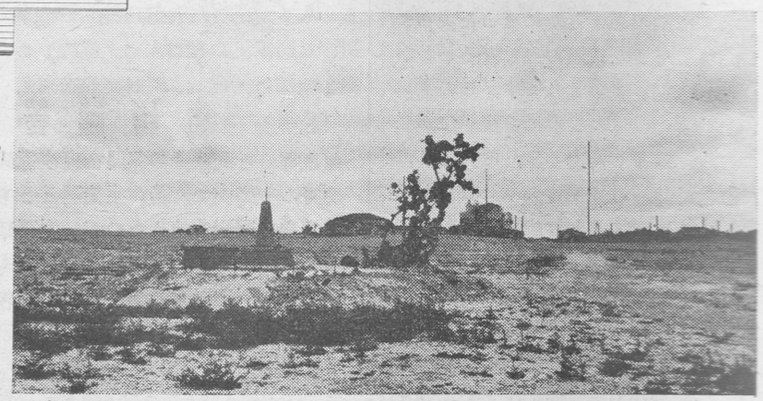
気象観測の孤塁，南鳥島との訣別

三つの墓と想い出だけを残して，南鳥島での観測業務は終った．永い委託を解除されて米国に引渡す今，万感の思いをこめて，日本人の体臭のしみ込んだ歴史や出来事をふり返る

淵本（ふちもと）　一（はじめ）





カット：南鳥島にたつ忠魂碑

1963年6月30日24時00Z時を最後として，マーカス島（南鳥島）の業務は，日・米間の契約が完了すると同時に一切を米国に引渡すことになった．

私は，日本が1951年この業務を米軍より委託されて以来13年間にしみついた“日本の体臭”と“マーカス天国”を夢見て，徐々ではあったが，確実に造り上げていった日本趣味の建物の一切を拭い去って，新しく米国式の様子に変えている姿を，はっきり見ると同時に，日本の財産・物資の日本への持帰りを，米軍機で行なうべく，職場掃除を兼ねて，最後の収容責任者として，湧き上る万感の想いを抱きながら，北太平洋上を飛んでいた．

毎年2月から始まって，3ヵ月ごとに東京を出航して，100時間を越す退屈な長い船路！　片舷35度を越すローリングに，吐き上って来る黄色い胃液を呑み込みながら，恨めしい眼で眺めた海！　今1万2000フィートの上空から見下ろすと，波の動きさえ見えず，唯一面の濃紺色の縮み地紋に，白く小さな海鳥を置絵にした“一越し”の反物を無限に拡げたとしか見えない，文字通りの太平洋である．

発見の話

ミッドウェー，グアム，硫黄島，小笠原島，日本列島で囲まれた4万km平方の広大な海域中で唯一つの中心点を示す南鳥島！　平和的な意味からも，軍事的な見地からも，拠点として絶好のポイントであることが分る．したがって海賊船や捕鯨船の横行した伝説時代は別としても，近代的航海術が発達するにつれて，この島への興味は世界的になり，各国の船の訪問が多くなって来た．

この島の記録上はっきりし得る最初の発見は，1864年（元治元年）ハワイの Mission ship “Morning star 号”の船長 Gelett の訪問である[1]．次いで，1868年5月の Captain Kilton が David Hoadley 号で来島しているが，この頃は，まだ地図も位置もはっきりしていない[1]．初めて測量をしたのは1874年，米国測量船 Tuscarora 号の艦長 Belknap で，東経154度，北緯24度14分と計測し[1]，その結果は，1879年刊行のブラックの地図に記載されている．次いで仏国の軍艦 Eclai-leu 号の艦長 Folny が1880年に探測して東経153度57分，北緯24度30分と報告している[1]．Marcus 島と呼ばれ始めたのは19C半ば頃からで，米国宣教師の命名と言われているが，この外に Weeks 島とも言われている．

日本人として，この島を踏査した記録としては1883年（明治16年）11月，高知県人信崎常太郎が英国船エター号に便乗してこの島に上陸したのが，初めとされている[2]．なお，不確実であるが，1879年に静岡県人斎藤清左衛門がこの島を発見または上陸したとも言われている[3]．

地図の話

私の旅行鞄の中には，古い地図の写しが数枚ある．これらの地図は，それぞれの苦悩の想いと，労力の汗と，執念と，願いとがこめられている．私は，私の一生の中で再び来ることが出来そうもないこの島で，これらの地図が私の心にささやき，示してくれる事柄が，どのように変えられて行くかを確認しておきたい．また残しておかねばならないものは，その由を，充分，米国側に申入れておく必要もあろう．この島は日本のものであることを私自身に，しっかりと，言い聞かせておかねばならぬと思う．私はこれらの地図に，その苦悩なり，喜びなりを物語らせて見よう．

地図の話　その一（第1図参照）

これは水谷新六によって作られ，日本人としての南鳥島の最初の地図である[4]．非常に簡単であるが，これによって，南鳥島が日本領土として確立される根底となり，南鳥島民営時代の先駆をなすものである．水谷は1896年東京禽獣会社南洋部長として，南洋方面の開拓を志し，当時日本にも判りかけていた疑存島グランパス島を探索する目的で，帆船天裕丸を仕立てて出帆したが，グランパス島は不明で，種々苦労の末，暴風雨に遭い，南鳥島に漂着．上陸調査し，この島が事業開拓に有利なことを確認して，急ぎ帰国の上，12月28日に小笠原島より23名を移住させ，同時に日本政府に，この島の地図と東経152度35分，北緯24度25分の位置を示して，南鳥島の貸与方を申請した．日本政府は，この申請により1898年7月19日に内務省令で，同24日に東京府告示によって，同島を「南鳥島」と命名し，東京府所属，小笠原島司所管とし，同時に島の位置を東経154度，北緯24度14分とした．また同年12月6日附で，10年間，同島を水谷に貸与することにした．（この島は初め，政府内にも発見者の名をとって水谷島とする案があったが，取止めになっている．また水谷村が島内にあったのを，それさえも後述の石井菊次郎の名をとって石井村と改称されている．水谷の偉業は，将来，南鳥島のどこかに彼の名をつけてその功績に酬ゆべきだと信ずる．ちなみに南鳥島の命名は，志賀重昂によると云われている．次に日本政府がこの時に採用した東経，北緯の値は，ブラックの地図に記載されている Belknap の測定と同じであって，水谷の測定と異なっている．何か意味があるような気もするが，この点想像の域を脱しない）

地図の話　その二（第2図参照）

日本政府はこのように独自の立場で，一方的な南鳥島の所有権を公示したが，未だ国際的に，日本の領土としての公認はされていなかった．そればかりか，米国には別の動きが始まっていた．

すなわち，米国人の船長 A. Rosehill は，帆船によって，水谷の踏査よりも7年前の1889年6月にマーカス島に上陸踏査し，この島が椰子油と，Guano（鳥糞燐砿石）の資源として価値あり，かつ無人島であることから，彼が最初の発見者であると誤信して，ホノルル駐在米国公使を経て，米国国務省に発見の報告と同時に，Guano 採取権の要請をしている．しかし米国務省は，それを記録に留める程度で，13年間放置した．しかし Rosehill は，この間に種々の準備を整え，1902年米国政府の許可を得て，“The Marcus Island Guano Co.”を設立して，帆船 Julia E. Whalen 号を仕立てて同年7月11日にホノルルを出帆，マーカス島に向った．日本政府はこの報に接し，南鳥島の水谷村にいる日本人との間に紛争の起るのをおそれ，外務省電信課長石井菊次郎を軍艦笠置で同島に急行させ，7月27日に着島したが，彼ら一行は未着のため，海軍中尉秋元秀太郎と陸戦隊員16名を，3ヵ月分の食糧を持たせて上陸させ，笠置は帰国した．しかるに，皮肉にも，次の日，7月30日に Rosehill は来島し，秋元中尉との間に小さなゴタゴタが生じたが，彼らも事情の不利を察し，Dr. W. A. Bryan と Dr. T. F. Sedwick の2人のみを上陸させて1週間の学術調査を行なった後，米国に引上げた．

この時の調査が“A Monograph of Marcus Island”として1903年 Bishop Museum から報告されている．しかし Rosehill の憤懣は，この事件を国際問題として，米国政府に提訴し，当時「南鳥島事件」として日米国間で論議され，一時は国際紛争問題になりかけたが，米国の沈黙によって，日本領土として，南鳥島の存在が国際的にも認められる結果となった．この間の詳細な，興味深い法的論争や，根拠等については，慶応大学教授・法学博士・手塚豊，1963年「南鳥島先占前後の一考察」（『法

(1) W. A. Bryan：1930年 Bernice P. Bishop Museum Occas
(2) 吉田茂彦：明治35年　地学雑誌16巻
(3) 明治35年7月26日　東京新聞
(4) 明治35年7月29日　東京朝日新聞

学研究』第36巻第1号)に詳述されている.

前記の秋元中尉一行は，迎えの軍艦高千穂が来る8月28日までの間に南鳥島の詳細な地図と位置を測定して，東経154度04分30秒，北緯24度17分30秒と報告した．この時のものがこの地図で，これは，日本における南鳥島地図の公示の初めでもあり[1]，南鳥島が問題になる時は，常にこれが引合いに出され．南鳥島の地図の基準としては最も権威ある存在として，長い間高く評価されたものである．なおこの権威の裏付けには，南鳥島事件という国際的な背景と，Bryanの報告と同時に，秋元中尉らを収容するために来島した軍艦高千穂には，明治35年8月に大爆発をした鳥島の学術調査を兼ねて，日本としては南鳥島の最初の学術調査をすべく同乗した，神保小虎博士，志賀重昂代議士，東京高師教授矢津昌永，農商務省技師金原信泰，同吉田弟彦という，当時の第一流の学者と，東京朝日新聞記者上野岩太郎，時事新報社記者宮本芳之助の一流ジャーナリストの他に，南鳥島の事業主上滝七五郎の8氏が乗船していて，それらの人々は帰国の後，それぞれの立場で堂々の論評と報告を発表し，その中で，常にこの地図がクローズアップされたことも見逃せない．

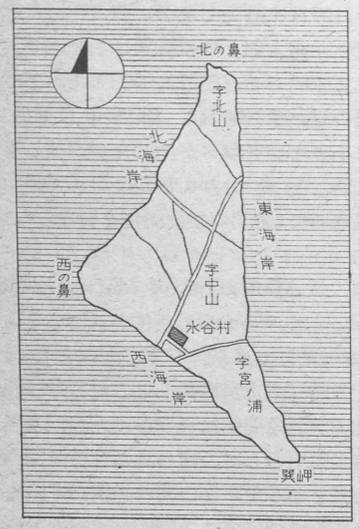
地図の話　その三（第3図参照）

いずれの時，所を問わず，開拓の創始期は順調に行くことは稀で，水谷らの仕事も，上陸後，幾多の苦労の後に得る収益は少なかった．これは南鳥島に資源が少なかったのではなく，経営者の頭の問題でもあった（当時の南鳥島はコアホウドリだけでも年間20万羽も殺してなお余裕があったことからも考えられる）．3年後の1900年9月に，水谷に代って，前記の上滝が運営するに及んで，収獲は急昇して，一時は在島者は70名に及んでいる．

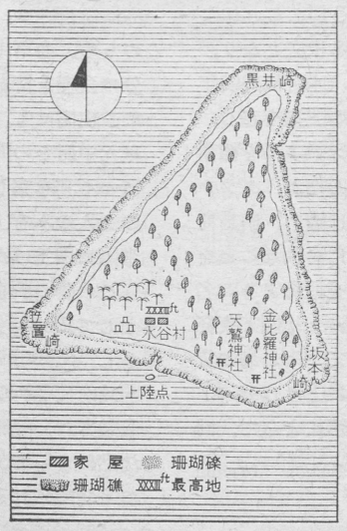
その後，水谷は上滝の頭脳と水谷の労力との共同経営を企画して，1901年9月から的矢丸，明徳丸，共和丸と相次いで船を出したが，これらの船は，天候にも恵まれず，また航海術の不足等で，あるものはフィリピン，香港等に流され，または米国軍艦に救助され，難破に近い漂流をしている．これらの苦悩にもめげず，水谷は1902年5月には小笠原島より49名の渡島に成功し，島の南岸中央に水谷村を確立して，ようやく水谷の上に繁栄の花が咲き始めた．

しかし，水谷は不幸な運命の星を背負った人だったのか，南鳥島事件後，政府の関心も大きくなり，事業も順調になりかけた11月頃から在島者に脚気が出始め，さらに，赤痢と推定される伝染病が発生し，本来風土病のなかった土地だけに医療の貧弱と無智と相まって，急速に蔓延して，高熱と焦慮に呻吟する者，濁った眼に声も出し得ない瀕死の顔，浮腫状態が現われ，腐敗し，屍臭が南洋独特の高温に異常な醗醗を漂わせても，火葬にする人手さえない，百鬼夜行の姿というか，悽惨な状態は，想像するだに，慄然たるものがある．島の南西部に記されている墓所（現在は島の中央に移されたもの），われわれが“開拓者の墓”と敬称している墓が，主としてこの時のものらしい．この惨事があってからか，1903年には島の経営者は南鳥島合資会社に移され，さらに1922年には全国肥料KKと変り，相当の活気を呈し，島の全面にトロッコ用レールが敷設され，安定した事業が続いた．

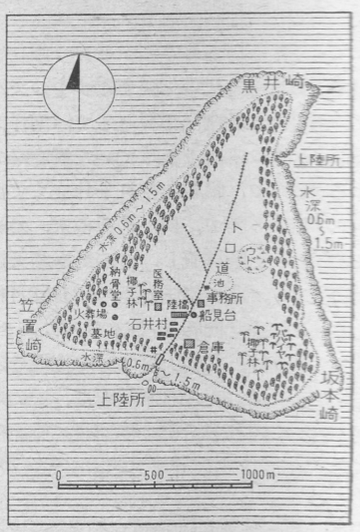
民営時代で最も繁栄した南鳥島の状況を示すため，水路部発刊海図第48号“南方諸島”の図に，当時の記録や資料から筆者が加筆し，将来の参考にしたのがこの第3図である．しかして，これらの繁栄は主として海鳥に依存していたにもかかわらず，計画性のない乱獲は，島の鳥を滅殺し尽して，1930年頃には単なる南の島と化し，



第1図



第2図



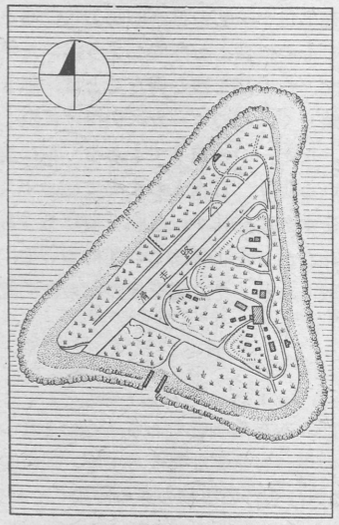
第3図

事業も衰微して，1935年旧海軍水路部が，ここに海軍気象班を展開し，10月2日に旧海軍技手松原映治が部下4名と共に軍艦駒橋で上陸した時は，無人島と化していた．当時，放棄されていた建造物や船の損害状況から推定して，この島の民営時代に終止符を打ち，無人化したのは1933年頃と思われる．なお「これは高潮による被害が想定された」という松原の言は，この島の高潮史の上から重要である．

地図の話　その四（第4図参照）

洋の東西をとわず，古今を通じて軍靴の足跡には，自然の景観や民芸の伝統は著しく圧変され，最も人間味の強い，民族の体臭は，同じ人種の間でさえ，動物的な皮革の匂いと，錆と血の臭気で打消され，焼跡に立ったような臭いに似た，軍隊臭が漂うのが常であるが，南鳥島もその例にもれなかった．松原が創設した気象観測所の後には，軍略の拠点として，南鳥島はクローズアップして，1936年3月からは軍用飛行場が建設され始め，横須賀海軍施設部は，東京近県の刑務所から数百人の囚人を動員して，大規模な軍事施設が開始され始めた．

殺伐な生活が軍の重圧のもとに続けられ，島全体の椰子も，島の中央に数十本を残すのみとなり，西岸沿いに1500m，南岸沿いに600mのL型滑走路が作られた．南岸中央には，小さな港とコンクリートの桟橋も構築されて，一応その殺伐部隊も引揚げ，一時，小康を保つかに見えたが，踏み出された進軍の軍靴は，日華事変となり，大東亜戦へと発展するに及んで，この島の軍事上の重要性は急増され，島全体が一つの要塞と化するに至った．大戦中は，度々の米軍の空襲戦闘によって，70名を越す戦死者を出した．当時の軍事施設の詳細は知るよしもないが，大略を示すと第4図のようになる．



第4図

幸いなことには，この島の標高が低かったことと，孤島であったため，その要塞化は硫黄島のそれに及ばず，米軍の進攻の障害としては，大きな役割を果し得なかったので，激しい上陸作戦も行なわれずに終戦を迎え得た．

それにしても終戦時は，独立歩兵第12連隊（連隊長世応純三大佐），海軍警備隊（司令官松原雅太少将）戦車12台，陸海軍将兵4500名（3700名ともいう）が駐屯している．この1km平方の，しかも生産能力を持たない小島に，食糧の補給を断たれた人心の混乱と不安は，同胞相食む惨状に変る危険性を孕んでいたが，終戦半月後の9月2日に米国極東海軍の進駐によって，この不幸は解消され，10月8日には全員退島して事なきを得た．しかし長い間愛称された“南鳥島”はマーカス島と改称され，軍靴の種類は異なるが，なお島は米軍制下に震えていた．

それにしても，残念なことは1935年10月以後の貴重な気象資料は，「軍資秘」の烙印のもとに，大部分が終戦時に焼却され，現存しているものは，月報は創立より2年間(内5ヵ月欠)，と年報は昭和11年より同14年までのもので，気象庁離島課に保管されている．気象資料は幾多の観測者の生命をかけた結晶である．したがって，気象資料の抹殺は，単なる記入された紙の消滅ではなく，その多くの人々の命を消す殺人行為であると信じている．

海賊船の話

終戦後，この島に米軍の進駐が始まったが，世界情勢は未だ平和には程遠く，戦火の余燼は局部的，または末梢的にくすぶり，再燃の危険性を潜在させていた．米軍はここに新しく滑走路を改新し，急速に軍事施設を増強して，その将兵数も相当多く，各種軍用資材は，日本軍時代を遥かに凌駕するものがあったようだ．

しかし，1947年に台風がこの島に近接し（この台風の年月日は，尚今後の調査にまつとして，多分に疑問がある），宿命的な高潮が襲来して，島の大部分を洗い流し，これらの施設を破壊し，資材は大被害を受けた．米軍はこれらの一切を放棄して急拠本国へ引揚げて，島は無人の原始にかえることができると思われたが，残された価値多き物資は，これを知る者どもの物慾をそそり，朝鮮動乱による金物景気もあって，フィリピンを中心とする国際人による海賊行為となり，数回にわたって600t級の貨物船が，これらの資材の盗み出しに来島し始めた．

この島の気象学的な重要性は前述の通りで，この島の気象資料の有無は，台風予報の，航空気象の正否に重大な影響があるので，1950年に日本でもその必要性を痛感し，予算化を計ったが，成立を見なかった．世界気象人の念願であるこの島の気象資料の確保を，米軍も企図して，この島の気象観測開始を，中央気象台に指令して来た．そこで，この業務運営に対する調査の必要があるので，日米両国の担当官が同年11月6日，米国海防艦グレンデール号で来島して見ると，海賊船が来寇していたので，砲戦準備をして威嚇を与えると，彼らはほとんど抵抗なしに，自ら船を環礁の中に乗り上げて，全員逮捕されてしまった．これらの海賊どもによって，日米両国の

桟橋にのこされた施設のスクラップ

高価な物質は大部分持ち去られていたし，また彼らは小規模ながら武装をしていたので，もしこの時，彼らと遭遇せず，われわれの気象観測が始められた後に，彼らの来寇があったとしたら，どのような悲惨事が出たか，想像するだに慄然たるものがある．この事件後も，逮捕された仲間の安否を探すためか，夜になると大型船の灯火が島に近づくのが見られたが，1951年中頃からはこのようなこともなく，米軍制下に管理されたとはいえ，潜在主権を持つ日本としては，この島を，軍装のない日本人のみで運営する仕事が1950年12月13日より開始された．

墓の話

南鳥島の墓は，島の中央にあって三種に分けられる．その一つは，創設以来，民間の力で築き上げた日本庶民の墓で，われわれは，これを“開拓者の墓”と敬称している．これは，元は島の南西部に在ったもので，墓石の数も相当多かったものであるが，日本軍の施設の進出につれて，現在の位置に，その一部が移されたものである．

平坦な孤島が武装される時，その主要な力点は周囲の海辺に置かれがちで，従ってこのように墓が島の中央へ追いやられたのであろう．この墓には，開拓の精神に燃え，狭い日本を少しでも広く，大きくしようとする理想を持ち，あるいはこの仕事によって自らの運命を開き，または，家族の苦労を助け，何らかの成功を夢に抱いて，遠く故郷を離れて，この無聊の，荒涼たる島に渡って来た人々の言い知れない望郷の想いと，やるせない寂莫の苦悩と，断腸の無念さとで島守と化した執念が，苔むした墓石の一つ一つに感ぜられる．

今一つは，海軍少将阿部嘉輔書する忠魂碑で，昭和17年6月4日町田隊によって建てられた，戦没将兵のためのもので，この墓のうしろは，火葬場とも納骨堂とも思われる石室になっている．日本防衛の護国の鬼と化した忠勇の士の魂を鎮める慰霊の碑である．

最後のものは，昭和28年，辺境の孤島で散華した戦士を記念する，「戦没日本人之碑」で，日本政府が，当時，定期航路もなく，また訪れる人とて稀な島々の戦没者の遺骨収集も兼ねて“日本丸”で運ばれた記念碑で，これには，瞼の父を思い，相愛の夫を偲び，一家の支柱を失った老翁のなげき，兄弟姉妹の悲歎の想いや，冥福を祈る心を綴った手紙や，供物が埋められている．従ってこの碑は，呪戦，悲恨の碑といえよう．

マーカス島は今回，気象庁職員の手から米国の運営に移されるに際して，一切の日本のものが取払われることになった．私は日本人として，このことが苦しみであり，淋しさであり，何とかして，何か残して置くことを痛感したので，離島課長の立場で，この島の工事，建設一切の現地責任者であるスミス米海軍中尉に，この三種の墓を現状のまま残すことを，強く，日本人の感情として，またもろもろの歴史の人々の想いを込めて，悃願した．幸いにスミスはこの申入れを快諾してくれて，公文の返事を送って来た．今，引揚げの責任者として渡島した私は，その約束が米国紳士として非常に立派に実行され，しかもこの実行は，今回の大目的である米国の工事の建設には，非常な困難を米側に与えたにもかかわらず，それらを克服して，日本海軍でさえ，自国民の墓を倒し，ホンの形ばかりの数の墓を，勝手に軍の都合のよい所に移したのに，スミスは全然，一指も触れず，かつ広い地域を立派に残してくれていることを，直接私はこの眼で確かめることが出来た．そればかりでなく，スミスは将来，ここを柵で囲い，花で飾ることまで約束してくれた．

南鳥島は，旧日本軍色や一切の日本的建造物は姿を消し，すべて米国式のものに変えられてしまうが，ただ一つ日本の象徴として，この墓を残し得たことは，私としては何にもまして嬉しく，私のマーカス引揚げに際しての責任者としての，ただ一つの誇りでもある．私は彼に「この墓が残っている限り，日本人のすべては必ずスミス中尉のこの善意を永久に忘れず，感謝を続けるであろう」と云わずにおれなかった．私はこの件について，私とスミスとの間に取りかわした文書を後のために明記しておこうと思う．

殉職の話

南鳥島での死者は，みな殉職者である．それぞれの時代と職によってその現われる姿は異なっても，民営時代は開拓事業に，あるいは会社の事務のために殉じており，軍時代は論ずるまでもない．しかし，このような孤島で職に殉ずる，その人の，その瞬間の心の中と，その周囲の人々の想いは相通ずるものであろう．

昭和37年5月27日，運輸技官久保欣三は夜の高層気象観測の第一次観測結果を無線室にとどけ，さらに第二次観測に引返す途中倒れ，後頭部を強打し，脳内出血を起した．1時間後，同僚がこれを知って，島中が大騒ぎとなった．早速，症状の詳細が気象庁離島課に知らされ，それはすぐ東京医科歯科大学病院に通知され，その後は刻々の症状と，それに対する処置がラジオドクター式に専用気象無線電信で連絡され，一方，米空軍第九救急機隊に病人救出の手筈がととのえられた．島中の人々は看護室に集って，それぞれの処置と安否に全神経を集中する．しかし，28日8時，久保はついに殉職した．

人間には誰しも，災難や不幸や，死の現象の起った時でも“自分だけは例外である”という自惚れや，自慰がある．このことが，その苦しみや悩みや，つらさ，やるせなさから自らを救い，慰め，脱がれさせているのであろう．しかし，孤島での病人や，瀕死の姿を看護する時は，この例外の感覚が起きて来ず，自分が病人であり，自分が死に臨んでいる姿として，これを直視する．この直視は，健康体も傷つき，そこない，神経的負担は極度に大きくなる．ノイローゼともいうのだろう．そうなのだ！　神経異常なんだ！　この異常を平常に戻すことは，島にいては非常に長い月日を要する．地図の話その二で述べた伝染病蔓延の悲惨事は，こんな生まやさしいものではなく，泣くにも涙が出なかったことと思う．泣いたり，わめいたりするのは一種の芝居であって，他から同情されたり，慰めてもらえるとの計算と期待がある時だけのもので，外見的にも精神的にも，裸の孤島生活の中に起る現象は，人数が少なければ少ないほど，芝居は不必要であり，茶番にもならなくなり，その深刻さは内面的であり，外見上は虚無状態となって来る．

救急機は重病者救出が最大目的で，死者の運搬は別の意味となる．救出機が出なくなった時は，一時は収納し得ない精神錯乱が島を掩いかけたが，米空軍6100部隊長の善意で，この遺体収容が航空機で実施された時の島の人々の狂喜と安堵はたとえようもなかった．しかし，心の痛手は，別の形となって永く島に沁みついて，楽しかるべきクリスマスパーティーの酒の中に，フト思い出したように屍臭が濁った色として一瞬ただよったりする．

島での業務の話

マーカス島における仕事は大別して三つあった．(1)気象観測業務，(2)航空援助業務，(3)通信業務がそれである．

(1)　**気象観測業務**　この島の気象業務の重要性については地図の話その三，その他にも少し触れたが，ここは北太平洋上において最も広大な海域中の気象学的真空海域であって，しかも，台風の発達過程を呈する海域であり，また豆台風等の発生地点でもあって，台風の発生論，構造論，移動論等の研究には非常に重要なキーポイントとなる地点である．また気象学上からは勿論であるが，航空機の経済運行の上からも，重大な要素となっているジェット流の南限状況を決定する大切な観測点でも

筆者とスミス中尉との間に取交された約束書

12 December 1962

To:　Ensign Smith, officer responsible for the construction of Loran station in Marcus Island

From:　Chief of Detached Island Section, Japan Meteorological Agency

Subj:　Preservation of graveyard and a monument in Marcus Island

The articles mentioned below are the things very valuable and memorable to the Japanese people. Therefore, we should like to ask you to agree that you will preserve the shapes and positions of those things as they are and that you will take care not to damage them.

In this connection, I request that you will sign the attached paper.

Description

1. Amonument to the loyal dead
2. Graves of the Japanese war dead
3. Graves of the pioneers

HAJIME FUTIMOTO
Chief
Detached Island Section

Enclosure: A written oath

12 December 1962

A Written Oath

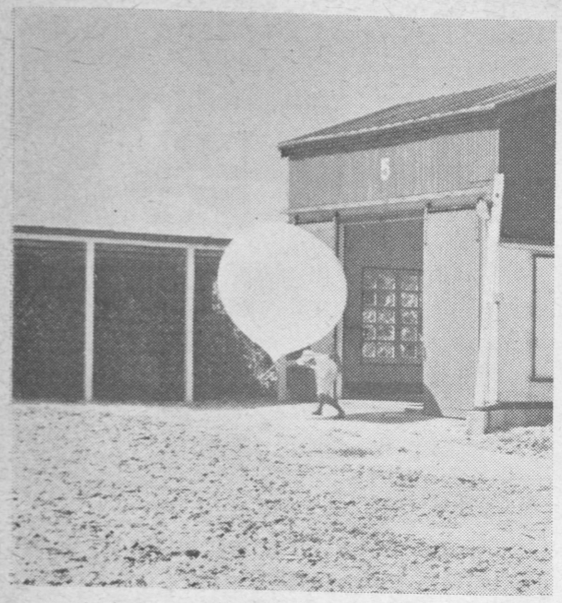
TO:　Chief of Detached Island Section
Japan Meteorological Agency

FROM:　Ensign Smith,
Officer responsible for construction of Loran station in Marcus Island,
OICC Far East,
Bureau of Docks and Yards,
YOKOSUKA

I swear to take measures that the following articles shall be kept as they are: their shapes and positions shall not be changed nor damaged, in case of the construction of the Loran station in Marcus Island beginning November 1962.

1. A monument to the loyal dead.
2. Graves of the Japanese war dead.
3. Graves of the pioneers.

By
SMITH (TITLE)



高層観測のため観測測器をつけた気球をあげる

ある．この資料なしでは，近代的気象予報に支障を来たすといっても過言ではない．これあるために，われわれの業務を打ち切るに際しても，一回の中断もなく，米国気象局がその業務をなんらの修正なくして引継いだことからも，そのことが立証されると思う．

したがって，台風通過の際は，他所では300 km に近接した時から，特別台風観測が開始されるが，ここでは500km以内から実施される．

気象観測には，(イ)地上観測，(ロ)高層気象観測，(ハ)オゾン観測等がある．

(イ)地上観測は，内地のそれと同じく気圧・気温・湿度・風・雨・空の状態その他で毎日00時から３時間ごとに行なわれ，気象庁へ専用無線電信で通報されるが，台風近接時及び航空機発着等の際は，毎時観測または30分ごとの観測に切り換えられる．

(ロ)高層気象観測．この島の気象観測目的の最大なもので，前記ジェット流の決定，基礎気象学，気象予報特に台風予想上では最要不可欠の気象要素であるので，高度が16,000mに達しない時は，何回でも観測をやり直さねばならないことになっている．灼熱の炎天下，暴風吹き荒さぶ悪天候の際でも，これは欠かされない．日本は気球充塡には水素ガスを使うので，爆発の危険もあり，この爆発のために顔，手等に大火傷を受けた犠牲者も出ている．観測は高度100m ごとの気圧・気温・湿度・風向・風速であるが，毎日３時（風のみ），９時，15時（風のみ），21時の４回が定時観測である．

(ハ)オゾン観測．人工衛星が飛び，好ましくないミサイルが問題になって来た現代では，超高層気象が重要な要素としてクローズアップされるのは当然である．地上２万m 附近にあるオゾンの濃密層の観測は平和目的からも，また気象学上からも大切な要素となって来る．直接にその層の観測は出来ないにしても，地上から上層までのオゾンの総量の観測が出来ても，それだけで意義があるので，この観測が日本は勿論，世界各地で総合的に行なわれ，マーカスもその重要な地点としての役割を果して来たわけである．この観測は，日中，その時々の天候の状況において観測が続けられた．この仕事は，米国の都合で数ヵ月の中断の後に，やはり米国気象局員の手で続行されることが約束されている

(2) **航空援助業務**　マーカス島は航空機の不時着場として滑走路を持っているので，この保持と修理がわれわれに義務づけられている．９万 m^2 に及ぶ広大な滑走路の保守は，雑草をとることだけでも，大変な仕事であるが，これはわれわれとしては重病人の際の救出のただ一つの頼みの路であるので，専門家でない36名の気象職員が，熱帯の日射を受けながら重労働の作業をした．想っても，よくやったものだと思わざるを得ない．この外に大切な業務は，無線航空標識の電波発射である．ホーマー・ビーコンと称されるもので，これは一秒の休みもなく 1.5kw の出力で，一定波長の電波が発射されて，これによって正確なマーカスの方位を，航空機に知らしている．これは船舶にも利用されて，太平洋航行の航空機・船舶には無電灯台として非常に高く評価されている．したがって，この業務も米国に寸秒の中断なく，引継がれている．

(3) **通信業務**　この島には気象専用無線通信としての装置があって，これによって気象通信が行なわれているが，この通信はマーカス島の運営に関する業務の簡単な事項の通信と，航空機や船の発着および遭難航空機や船の通信も行なうことになっている．したがって，航空局や海上保安庁の役目の一部も背負わされているわけである．島で重病人が出た時のラジオドクターの聴診器の役にもなり，内地での不幸の悲しみや，おめでたの歓喜の感情も，この見えない絆によってのみ伝えるだけである．３ヵ月に１度しか訪れてくれない補給船の外は，この通信のみがただ一つの愛情交流の方法である．

以上の三大業務を運営するには，その動力となる電気は自力によらねばならないので，島では95馬力のディーゼル発動発電機が３台あって自家発電をしている．この運営も，われわれ気象庁の職員がやらねばならない．

マーカス島は，全島珊瑚礁で出来ているため食糧になる重要な植物の生育は不可能なので，３ヵ月間の食糧は全部内地から持ち込まねばならない．したがって，限られた材料で料理せねばならなくなる．島には，腕ききの調理師が３人いて，職員全部の食卓を飾っている．島での楽しみの最大の一つは食うことであるので，この調理師の苦労は大変で，沢庵漬の切り方でさえ眼の色が変ったりすることでも想像出来ることと思う．飲水は，天水に頼り，ビタミン不足に悩みながら，これらの一切の業務を，絶海の孤島で，気象庁職員の男ばかりの36名でやり繰って来たのが，マーカス業務の実際である．楽しみも自ら造り出し，苦しみも淋しさも自らの力で克服して日本の災害を守るという誇りと，世界の気象の一翼を受持っているという自負とで，この苦しみを消して行くいじらしい姿が，昨日までのわれわれの姿でもあった．

サヨナラ南鳥島

私は冒頭で“1951年からしみ込んだ日本の体臭”という言葉を使った．しかし今，南鳥島は日本人の手になったものが取りこわされている．去りしもの，在りしものの今昔を思い，見，そして偲ぶとき，この島は1896年水谷が初めて島に入る迄は，南極と同じように処女地であった．したがって，この島は1897年以来60余年間，日本だけの匂いが島の髄まで浸み通っていて，ある意味では最も純潔な日本臭であったといえよう．この日本の“体臭”は終戦後の２年間だけ一寸米国のバターの匂いが入ったが，今日まで，味噌と沢庵と尊い殉職者の血の匂いがリーフの一つ一つに浸透しているはずだ．

今地上に見える建造物は，墓場を除いて，全くこの日本の姿は消されつつある．深い濃緑のジャングルを白銀色の白砂で囲んで濃紺の海に浮んだ，私はこれを“エメラルドの花台”と呼んだ．この島も，そのジャングルも切り抜かれて，一面の灰白色の骸骨の島となっている．島を去ろうとする私達の眼に残るのは，墓だけが執念の霊魂のように島の真中にしがみついているだけである．

去るに際して，いろいろの感傷や寂莫を覚えるはずだが，引揚げの仕事はあまりにも多く，あまりにも疲れ過ぎて，想いを追うべき夜はただベッドに身体を投げ捨てるようにして眠るだけで，一人一人の顔には，熱帯の強い日ざしに焼き，すりへらされた神経が，皮膚の焦げた色のようにドス黒く，にぶっているに過ぎなかった．

それでも明朝は引揚げと決まった７月８日12時の無線連絡を最後として，もうわれわれのすべてが終ったと思う時，極楽に通ずる細い，ただ一本の蜘蛛の糸を切られて，地獄の奈落に落ちて行く亡者の悲哀と，無念さが，電撃を受けたように全身を通り抜けるのを覚えた．この想いは墓場に眠る殉職者の霊魂にも通じたであろう．

これは必ずや不死鳥のように，よみがえり，いつの日にか再び日本人が自らの手でこの墓守りとなって帰り来たり，自然の美と平和とを取り戻して行くことであろうし，またそうせねばならないことでもあると信ずる．

今，帰国の米軍機の中から小さな窓を通して見返る南鳥島の姿！　それもホンの数秒の惜別の瞥見ではあった．それでもそれは私の心に，魂に，強く，烈しく焼きついて，忘れ得ない，離れがたいものであった．サヨナラ南鳥島！

〔気象庁離島課〕

ずいひつ

恐怖臭

高見　順（たかみ　じゅん）

さきごろ『婦人公論』の巡回講演会へ行った時，においの話をした．『味覚の生理学』のブリヤ・サバランは，おいしいご馳走のそのおいしさの３分の２は，実はにおいにあるといっている．そういったにおいの話だが，女性を中心とした聴衆なので，香水の話もした．女性は一体，香水を自分のためにつけるのか，ひとのためにつけるのか．多くの女性は自分で自分のためにつけると思っている．たしかにそういう場合もある．それは自己満足，あるいは自己陶酔のためか，さらに自己主張というか，自己表現というか，香水をそのためにつける．香水をつけることによって自分の魅力を主張または表現しようというのである．となると，香水はひとのためにつけるのだともいえる．はっきりそれを自覚している女性もいる．

そういった話から文学の話に移ったが，私たち作家は，小説というものを一体，自分のために書くのか，ひとのために書くのか．これは女性と香水の問題に似ている．ひとのために書く小説は大衆文学で，自分のために書く小説は純文学，そういった割り切り方もあるが，自己満足に終る自己表現ならいざ知らず，自分のためといっても，香水の場合と同じように，やはり同時に他人のために書くという微妙さがそこにひそんでいる．

ところで私たち作家は，書斎にあってひとりで原稿を書くのが仕事で，多くの聴衆の前に自分をさらして，講演をするというようなことは，日ごろの仕事と違って，はなはだ苦痛である．精神的なその苦痛は，肉体的な変調をともなって，こういう場合，一種の悪臭が皮膚から出てくる，ということを，アメリカの，においの学者が書いていた．私はそれで知ったのだが，不安，恐怖のにおい（Fear Odour）というものがあるというのだ．演壇に立つということはただに作家だけでなく，誰にでもいやなもので，そういう場合，誰でもがそういう時に特有の悪臭を発散する．これをアメリカの学者は Platform Odour と名づけている．講演中の私は，悪臭を目下さかんに発散中である，と聴衆に向って演壇からいった．ハシゴに乗るとやはりいやな気がするが，この場合のにおいは Ladder Odour．皮膚から分泌されるにおいには，恐怖や不安の種類によってそれぞれ違いがある．

こういったにおいの話を講演でした．同行の『婦人公論』編集長がそれを本誌編集長に話したらしく，その恐怖臭のことを書けと求められた．私はその時，激しい恐怖臭を発したに違いない．というのは，私はもと『サイエンス・ダイジェスト』という雑誌をアメリカから取っていたが，数年前のそれに Will Bernard という人の“The Magical Sense of Smell”のダイジェストが出ていて，それで恐怖臭のことを読んだ．そのおぼろな記憶で図々しく恐怖臭の話をした．雑誌も今は手許にないし，到底原稿に書けるような話ではないと，一応は本誌編集部に断ったが，日本にもこういうにおいの研究をしている学者がいるに相違ない．その専門家に改めてちゃんとしたものを書いてもらうための，いわば呼び水として，この一文を草した．〔作家〕